1

日本海々戦に臨

h

あったことは、今さら申すまで

戦勝を得た日露戦争の大立物で

あったことは周知の事柄であり 三十一年)のことであります。 をみたのは、一八〇一年(明治 代長官が東郷平八郎中将で 当地舞鶴に海軍鎮守府の開庁 東郷といえば僥幸ともいえる

東京に建て、横須賀、 れんか、ロシア帝国はその偉容 もありません。もしこの戦に敗 日本海の玄関を護る大要塞を築 を高等警察の本部とし、対馬に を示すために壮大な総監官邸を 大軍港を作る。 憲法は停止され、国会議事堂 島内に政治犯や銃刹刑の執 佐世 保に

ナム海軍大佐の述べるところで

あります。

菩

佐の予言は決して的を外れてい るとはいえますまい。 取等々の事実をみても、 立宣言の破棄、シベリアに抑留 しての強制労働、北方四島の奪 元二郎大佐の予言であります。 背後で諜報活動に活躍した明石 行所を設ける…〟とは、 第二次大戦時の、一方的な中 露国の 明石大

悲劇ともいえる災禍に臨んで、 して爆雷による惨禍は、虎の子ばならないにも拘らず、一朝に 隻は触雷により沈没)が居り、 いたイギリスの観戦武官、ベケ 東郷の態度は如何であったか。 のであります。この悲劇以上の 方の六隻の戦艦を駆使しなけれ 艦八隻とも対恃するには、我が バルチックより回航してくる戦 オストックに七隻の戦艦(内一 で、その戦力といえば、ウラジ 「初瀬」「八島」を失なわしめた 次は、戦艦「朝日」に乗って

固く握手したという。 とう、ベケナムさん」と云って だやかに微笑しながら、「ありが の意を伝えたところ、東郷はお 事態に対して、彼が東郷に同情 このたとえようもない悲痛な

たのでありますが、 視のあとについて、艦内を回 そのあとベケナムは東郷の巡

どはその挙措のいかなる部分に 顔に威を湛え、昨日の惨事な 「足固く踏み、胸正しく張り、

> 発 行 所 〒625-0010 舞鶴市松尾 西国29番松尾寺 編集発行人松尾心空 TEL(0773)62-2900 FAX(0773)62-2028 舞鶴「靜坐の会」 4月より11月の

第3水曜日 舞鶴トラベルにて PM 1 時より

う確信を朝日の山田艦長に告げ たことであった」 参謀に逢った時は、<br /> と述べ、また後年、 「あの時ほど、人間の偉大さと やはり東郷提督が勝つとい

秋山真之

いうものを感じたことがない」

られなかった朝日乗組みの六百度に接して、昨夜の悲しみに眠 の将兵はにわかに安心を恢復し 哲是司令是官立師居至中将 年五秋日看抄值了府设值的版以 後になって東郷平八郎元帥に 松飲やくもは の毋方の祖父だった。目下その

### 北 鎖 鑰 巍然成 虎 踞龍 盤 気 勢昌

## 将 軍西海傑 西 郷之後 有 東 郷

鎮

海

奉呈 辛丑秋日 司令長官東郷海軍中将 舞鶴鎮守府設備始成賦拈 松嶺臥雲老叟

を痛感した。そうして次の海戦 主将の自若たる態度であること を思わせた。私は敗戦を勝利に に会って一斉に頭を上げた光景 回らすのは、 た。あたかも萎れた草花が慈雨 往々にしてかゝる

度であらるるのは、禅でも修め むかって記者が、「常に不動の態 修めた為だ」と答えた。 ねた。すると元帥は「幼時伊東 られし結果でありますか」と訊 猛右衛門先生に就いて陽明学を この伊

> 系譜を調査中なので、今はこれ なと密かに楽しんでいる。 木さんがびっくりするだろう 以上書けない。ここを読んで五 以上が川西氏の解説の一部

でありますが、

更に西郷

南洲

に陽明学を教えた。明治維新の 原理を教授したのが、 原動力となった志士に革命の の著書がある。猛右衛門は近所 表する陽明学者で『餘姚学苑』 治木町で隣り合わせに住んで 東郷家と伊東家は鹿児島の加 の作者埴谷雄髙の祖父である。 に住む西郷隆盛、大久保利通ら いた。猛右衛門は薩摩藩を代 **猛右衛門というのが「死霊** 埴谷雄髙 性と、現今の貧困を思わざるを る時、幼時の精神的素養の重大 帥への心酔ぶりとを併せて顧み とて西郷の末弟小兵衛をはじ 語録によれば、これからは武術 提督ニミッツ海軍大将の東郷元 なりません。 て陽明学を重んじでいたこと 弟子入りさせています。 名な陽明学者、春日潜庵の下に ならない。実用の学問をせよ。 だけでは行けぬ。学問こそ必要 で、それも書物の虫であっては 兼ねて、大平洋戦争の米海軍 以て、明治の元勲たちが挙っ 刮目すべき事柄といわねば 四人の青少年を、京都の著

明氏の解説の一部であります。 セルのピアノ」の巻末の川西政

といっています。

以下は、五木寛之著「ステッ

祝う漢詩軸 九一三)の東郷長官の就任を 松尾懸空上人(一八四六—

巍然として成る虎踞龍盤(虎や北門の鎖鑰(鍵となる要衝) している、踞も盤もうずくまる) 気勢昌んなり 龍ともまごう勇猛の兵卒が警護

鎮海の将軍は西海(薩摩) 0)

西郷の後に東郷あり

〇辛丑 一九〇一年 三十四年) (明治

松 嶺 青葉山松尾寺

○ **と と と と と と き ま** 老翁 懸空師の号

郷さんと親交があった。漢詩を 東郷さんに献呈した詩である。 よくし、書家でもあった上人が 現住より四代前の懸空上人 青葉山へよく狩りに来た東

いの記憶が蘇ったものです。

補生学校卒業生の遠洋航海の旗 が、その理由であるのかも知れ その都度講演に招かれていたの 節が特にある訳ではありません 舞い込んだものです。思い当る 泉純一郎」と記された案内状が りませんが、封筒の裏面に「小 であったか、記憶が定かではあ 艦「かしま」に出向くときは緊 会の名称が現在の通りのもの 永年、当地海上自衛隊に、

もある由の添え書きもありまし 急の場合、首相が出られぬ場合 るとも思えません。その上、 か、昵懇の向きが容易に見つか に出向いても、旧縁を温めると さて、と一思案。そうした場 緊

箸を動かし盃を傾けている様子 うと決意したものです。 は一番、思い切りよく欠席しよ めな心境になりそうで・・・・こゝ を想像すると、何か自分がみじ 談している中、孤りで何がしか ともあれ、参会者が夫々に歓

案内状は参りません。 当時私の想像したものとは様替 かもしれませんが、今や当会は、 りしているようで、今なら出席 う勇気が湧いたかも知れません。 以上、山寺の孤独な僧の僻み

## 才 リンピック

りも印象に残りました。 統の頭髪ふりみだしての落胆ぶ て失格した瞬間のヒットラー総 ドイツの選手がバトンを落とし を呑んで見つめたものでした。 大江、西田の勇姿は既に結果が 高跳の死斗を繰り広げる、我が、 迫る中、メドウス(米国)と棒 分明しているにも拘らず、 「民族の祭典」を通して観たベル リレー競技で、健斗している

なくも垣間見る思いでありま マチュアリズムの一端が、はし していたとか、仄聞しました。 で、馬と競争する見世物に出演 は余り生活に恵まれなかった由 なって知った話ですが、その後 リストは、アメリカのオーエ ンスでありましたが、随分後に クーベルタン伯の徹底したア さて、時の百米競走の金メダ

今も印象深く覚えています。 けれども、そのうち、 しまいには嘔吐をしてしまう。 で、当時の練習は苛酷なもので、 もっておられました。明大出身 ため第六位に甘んじた経験を たにも拘わらず、 した。金メダルの下馬評もあっ の走高跳に出場した朝隈さんで たのは、ベルリンオリンピック が旧制高校で体育の指導をうけ なくなった、という体験談 まで練習をしないと、満足でき ところで話は変りますが、私 急性蓄膿炎の 嘔吐する

> す。朝隈さんは徹底してオリン さも、NHKの番組にかなり サマランチ会長を批判しておら ピックの商業化を嘆き、当時の れました。 以前に放映されたことがありま て上げるコーチとしての頼も

TVの放映権料をめぐってマラ アマ、プロの区別もなくなり、 ソン競争には最悪の盛夏という

のように聞くでしょうか。 る、という話をオーエンスはど

較べて異色で珍しさも手伝って 著者の旧著「真空地帯」などに 氏解説のちくま文庫本でした。 抄」を読みたくなって、京都の 本屋で眼に触れたのが、野間宏 **久しぶりで、旅の途中「歎異** 

問題に触れている条りで、大畧 の氏の解説をみて驚くのは公害 いささかも現状は変っていない 半世紀前の所見でありながら、 ことでした。 さて、本文はともかく、巻末

私見も加えれば、山寺での享受更に、ビニール禍についての は、次のような過程でした。

継ぎ目になる、木の細工にはか らの寿命は余り長いものではな までもありません。そしてこれ を用いていたことがあります。 なりの技巧を要することは云う 湧水を下に誘導するのに、

又、八米を跳ぶジャンパーを育

なります。

ところが、商業化は漸次浸透、

げれば、一億円の御褒美が出また当のマラソンで、成果を

手に奔走した時、TV は零時を 零時までと自粛したものです。 以て放映せず、 トイレットペーパーを争って入 かつて、石油不足、物不足、 ホルムズ海峡に海上自 ネオンサインも

でありますまいか。 戒せねばならぬ所に来ているの ライトアップ等々、もう少し自 臨んで、夜間照明、 衛艦が派遣されるという事態に かく云っている間にも、北極 終日営業、

を瞠視する必要がありましょ 招いてその累我が身に及ぶこと の氷は溶け、核のゴミは集積し、 二酸化炭素は増え、挙句荒天を

地球環境の劣化等、 危機は身近に迫っています。

要しました。 ジを廻すことには相応の努力を 細工より遥かに簡単ですが、日 に異物が入ったときのさびのネ を経て錆びついてきます。管内 継ぎ目はネジで木の

の出現。 そこへもってきてビニール管

めであったのですが、今や深海 思いになります。 六千米の水底に息をひそめて蟠 塑性豊かに変形自在なこと。 かつての福音今いずこ、という ひそんで、その禍害尠なからず 居し、時あらば、魚類の体内に **腐朽せざること。正に福音ずく** ぐことの簡易なること。容易に 人類に及ぶ、というに至っては、 その切断の容易なること。 継

下腹に神性の殿堂を築いて神性 これが人の人たる道である。 岡田虎二郎の言葉

歩にないと疲れる」といってい る時、心が頂上にあって一歩一 王陽明がいうには、「山に登 人生のことは全てそうであ

ならぬ。 人は常に頭寒足熱でなければ

行先を忘れて登る不死の

次いで鉄管を使用することに 虎二郎創始の靜坐の集いを始め ありますが、按座することに大 て、今年で十二年目になります。 ベル」2Fを会場として岡田 所謂「正坐」と多少の相違は JR東舞鶴駅前、

可 る如く、情報の断食化を以て、 毒素を排出してその再生を期す 内臓の安らぎを勸め、蓄積した 世相をみるにつけ、断食を以て のように、スマホに、TVに、 きな違いはありません。御承知 心の回生を期す試みに他なりま 眼も、心も、魂も奪われている

ことなく、心の浄化、魂の復活 を期することが、今日程有意義 に思われることはありません。 雑多な情報に振り舞わされる

> **六、「即身成仏手形」**(第四版) 五、「極楽往生手形」 (第五版)

四月より十 P M 1 第三水曜日 時より 月 4

神性の殿堂である。

小冊子 十三、「巡礼 まんだら」 "巡礼日記』を読む」

十七、「松尾寺蔵、国宝・絵画』 十五、「新渡戸稲造著、武士道、 王ハ、「般若心経の"空、体験」 について」(第七版)

# 松尾心空著作集

歩く巡礼 三部作 三、「西国三十三所徒歩巡礼地 二、「西国札所古道巡礼」 一、「歩行禅」(新装版)

地図」の三点セット。 歩く巡礼の「心がけ」「記録」

機縁に十六版を重ねましたがこ ろのページ」に紹介されたのを のたび新装版となります。 長の推挽をうけ、朝日新聞「こゝ 書は、当時の髙田好胤薬師寺管 四、「人生往来手形」(新装版) 手形シリーズ 三部作 昭和五十二年に発刊された当

九、「猫と和尚さん」 七、「現代いろは加留多」 八、「人生まんだら」(第六版)

十、「妖説水子地蔵」 (日本図書館協会選定図書)

十一、「人生の達人」(再版) - 二、「人はなぜ巡礼に旅立つのか」

十四、「歌僧 天田愚庵 (以上、東京·春秋社刊)

(すずき出版)